

海神「わたのかみ」と龍王

土田龍太郎

筑紫に天降りたまひし邇邇藝命の妃となりませる此花之佐久夜毘賣の八尋殿の燃ゆる火のさ中に入りて産みたてまつりし御子のうち火照命と火遠理命の二柱は海佐知彦と山佐知彦てふ御名もて世に知られたり。山幸彦の御兄と諍ひてつひに海原の内に入りたまひ、海神の女なる豊玉毘賣を娶りて三年まで魚鱗の宮に暮して後、海幸彦を懲したまひしことなりゆき、古事記日本紀に詳かにて、今の世の童だに知らぬものまれなるめれば、ここにさらにまねばでもありなむかし。

そも魚鱗の宮の主なる綿津見神の素姓を尋ねむとせば、伊邪那伎大神の黃泉國を出でてほどなく日向の橋の小門の阿波岐原にて行ひたまひし禊祓にまで遡らではあるべからず。この禊祓にてげにあまたの神々成り出でたまへど、三柱の綿津見神かの三柱の墨江神ともども生れたまひけること、また綿津見神の阿曇連の祖神なること古事記につばらに説きたり。

豊玉姫すでに妊みたまひて、海べにて鶴菖草菖不台命を産みまゐらせしとき、

凡て他國の人は産む時に臨れば本つ國の形をもちて産むなり。故妾今本の身をもちて産まむとす。願はくは妾をな見たまひそ。

とあらかじめ警めたまひけれど山幸彦いぶかしさにえたへで警めに従はず。すずろに産屋を垣間見たまひければ、豊玉姫八尋和爾に化りて飼飼ひ委婉（わらば もとよひ）てありけり。

伊邪那伎大神の禊祓したまひしをりに生れましし綿津見神三柱に初より和爾の族（やから）と縁（えにし）ありたりやいなや、いぶかしきかたなきにしもあらず。同じ神に關れる異る傳へのありて、ともに今見るごとく古事記の内に併せ載りたるにてもやあるべし。

豊玉姫恥しさにたへず海に還りたまひしかば、かはりて弟妹玉依姫、菖不台命を養ひ後には妃となりて侍（かしふ）きまゐらせたまへり。

かかる傳へにもはらよらむとせば、後に神武天皇と號びまゐらする神倭伊波禮毘古命の御母玉依姫、御祖母豊玉姫さらに御曾祖父なる綿津見神、いづれもまことの形は和爾にてありけりと思はではかなはざらまし。

そもそもここに和爾と云へるは鮫なりやはた鰐なりや、これまた定かならず。鈴屋大人は古事記傳の内にて

麻果切韻云鰐似鱉有足喙長三尺甚利齒虎及大鹿渡水鰐擊之皆中斷和名和仁

と倭名抄に云へるを引きたれば、和爾すなはち鰐にて魚にはあらずと思へるがごとし。
鰐と鮫といづれも鋭なる齒をそなへその性いとも荒れすさみてかたみに似よれるところ

少からず。あるいはわが國の古へ人鰐と鮫と同じものの女と男なりと思ひなせりしにてもやありけむ。かく云ふはわがわたくしのあとなき推し測りにすぎねば、ここにさらに論はでもあるべし。また神皇正統記の内に、山幸彦の産屋を覗見たまひしとき^{めを}豊玉姫のすでに龍の形をそなへたりしおもむきを記せれど、北畠准后そもいかなる典によりてかく説けるやらむは知るによしなし。

わが皇孫すめみまのいとも尊き御血筋に、そのまさしき姿はなににてもあれ、和爾なる異類の初よりわかつちがたく關れることげに思ひのほかにて、くすしといひあやしといふもおろかなり。豊玉姫の御子を産みまゐらせしよりやがて還りたまひし海神の宮、佛書に説ける龍宮とさも似たることげに鈴屋大人の記せるごとし。佛書の龍王とてもさまざまなもの、わけてわが國人のなじみきたれるは、釋迦牟尼世尊の法華經を説きたまひしとき來會し聽聞せるなる沙伽羅龍王など八大龍王にて、同經提婆達多品に語る龍女の變成男子と成佛のこと弘く知られたれど、この龍女とはすなはち沙伽羅龍王の娘にてぞある。梵語に那伽ながといへるが佛書の龍なれど、那伽とは今にいはゆるコブラにて蛇くちなはの族やからなれば、漢文に見ゆる龍とは姿形またく等しきにもあらず。沙伽羅とはまた海洋をさす梵語にて、沙伽羅龍王すなはち海龍王なれば、わが綿津見神のごとくつねに海中わたなかの龍宮に住ひせるにまぎれなし。平家物語灌頂卷にて龍女成佛に言ひ及べるは建禮門院を沙伽羅龍王の女に擬へまゐらせるなり。

釋氏の教法わが朝に渡り來り貴賤上下おしなべてこれに歸敬せるにしたがひて、海神と龍王と別ちがたくなりゆきて、ややもせば同體に見なされまじきにもあらずなりぬるは、この海神と龍王とかたみに類へ擬へやすきところの多きを思へば、げにさりがたきわざにこそ。

人皇初代神武帝の御祖母なる豊玉命の八尋鰐なりけむはすでに云へるごとくなれど、このほかに皇孫すめみまの御筋の龍蛇の屬やからと淺からぬ縁えんのありけむこと、中比に出で來し典どものこかしこに見ゆるは、まことしこそは思はれね、心ひかるるかたはたなきにあらず。

平家一門の壇の浦に亡びしどき、二位の尼の安徳天皇を懷きまゐらせて海に沈みし後、神璽と内侍所はことゆゑなく都に遷らせたまひしかども、寶劍ばかりは再び現れず失せはてぬること弘く知られたれど、これにつきて天台座主慈圓、愚管抄の内にて左のごとくに説きたり。

海ニシツマセ給ヒヌルコトハ、コノ王ヲ平相國イノリ出シマイラスル事ハ、安藝イツクシマ明神ノ利生ナリ、コノイツクシマト云フハ龍王ノムスマト申シツタヘタリ、コノ御神ノ、心ザシフカキニコタヘテ、我身コノ王ト成テムマレタルナリ、サテハテニハ海ニカヘリヌル也

トゾ、コノ子細シリタル人ハ申ケル、コノコト誠ナラムトオボユ

コノ王トハ安徳天皇にほかならで、この帝まことは龍王の女にて、平清盛の歸依せる嚴嶋明神なりけりてふ一説を引き示せり、さらによしと申すは沙伽羅龍王の女子なりてふ嚴嶋明神の託宣、醍醐寺新要錄に載りたりとも云へり。

平家物語には異本くさぐさあれど、わが日頃なじめる刊本を披き見るに、卷一に劍といへる章段ありて、寶劍沈みしままにつひに失せぬるゆゑよしを述べしすゑに、安徳天皇まことは八股大蛇の化身なりてふいかにもあやしきことと左のごとき勘文をも載せたり。

——ある博士の考へ申けるは、昔出雲國ひの川上にて、素戔烏の尊にきりころされたてまつりし大蛇、靈劍をおしむ心ざしふかくして、八のかしら八の尾を表事として、人王八十代の後、八歳の帝となりて靈劍をとりかへして、海底に沈み給ふにこそと申す。千いろの海の底、神龍のたからとなりしかば、ふたたび人間にかへらざるものよりとこそおぼゆれ。

ここに示せるごとく、もし八股大蛇やがて神龍なりとせば、この大蛇と沙伽羅龍王とまたく同じきやいなやこそはえ定むまじけれ、たえて縁なしとしも思ひがたからまし。

崇神天皇六年、殿を同じくしたまふを安からずおぼしめして、草薙劍をも大和國笠縫邑に移しまゐらせ、あらたに御身の護りとて、齋部氏ひきのを率ひきて天目一箇神あらのまつつののかみをして寫しの劍を造らしめたまひしこと、古語拾遺に記せり。しかれば西海に沈みはてぬるは正體の草薙劍にてはあらず、後に鍛いはへまゐらせし寫しにすぎねば、まことの寶劍が失せしにはあらず。今の熱田に齋ひまゐらする劍こそ正體の草薙劍なるにまぎれなけれ。のこと平家物語の劍の章段にもつばらに説きたれば、八股大蛇が安徳天皇に生れかはりて正體の劍をとりかへしたるおもむきを述ぶる右の勘文とは本末うちあはぬがごとくなりていぶかしきことこよなし。寶劍の正體にはあらぬことを知りつつ八股大蛇のなほそをわがものにせむとたばかることのありうべしとはをさをさ思ふまじければなり。

そははたいかにてもあれ、かかるあやしき傳への出できぬるは、熱田のことはふつと忘れて、西海に沈みぬるは正體の寶劍にことならずと思ひしみたるともがらの世に少からざりしがゆゑなるべし。慈鎮和尚すらなほかく思ひ誤りけむこと、愚管抄の書きざまによりてぞ推して知るべき。

かの北畠准后、かかるあとなしごとを訂さむとて、神皇正統記の内にて草薙劍につきて敍ぶることいとも詳しく述べることわりたちたれば左に引きみではあるべからず。

寶劍も正體は天の叢雲の劍——後には草薙劍と云——と申すは熱田神宮にいはひ奉る。西海に沈みしは崇神の御代におなじくつくりかへられし劍なり。うせぬることは末世のしるしにやとうらめしけれど、熱田の神あらたなる御こと也云々 なべて物知らぬたぐひは、上

古の神鏡は天徳長久の災にあひ草薙の寶劍は海に沈みにけりと申し傳ふること侍にや。

返々ひがごとなり。此國は三種の正體もちて眼目とし福田とするなれば、日月の天をめぐらん程は一もかけ給まじきなりひるめ
ひるめ
ひるめ

かけまくもかしこき日女大神の御裔、天日嗣を世々に傳へたまひて、御裳濯川の流れ絶えせず天地とともに窺りなければ、仰ぐにいや尊くなりまさるはされることなれども、この天日嗣の御筋に海神龍王の族とゆかり淺からぬことこちらの典に説きたれど、右にはただかたそばばかり引きたるのみ。かかる傳へいともよしありげにてあやしきことこよなくて、あさましきけさへそひたるはいかさまやうこそあらめ、まことはいかがなりけむ、せちに知らまほしけれど、これらなべてわが拙き智慧のえ及ぶさかひにあらねば、今はさながらさしおかもほかすべなきぞあいなき。

およそ龍蛇龜鰐のたぐひ、今の世にはおしなべて爬蟲類などといふを習ひとすれど、畏きわが皇孫すめみまの御筋と、ものにもこそよれ、かかる爬蟲類と近きものに思ひなせしともがらのわが國の上つ世と中比いろにここらありたりしことばかりは疑ふまじきにこそ。

爬蟲類なりとてあなたがちに忌むべからず。かかる異類との關り、かへりてわが皇御國の玄く幽く祕かなる奥處おくがを窺はしむるつまとならざらむもはかりがたければ、ゆめなほざりに思ふべからず。これらのことども、まことなりやそらことなりや、やがて定むべきすべとはなけれど、かにかくにいみじくおもしろしといはでやはあるべき。

(令和七年六月二十六日受附)